学童疎開の記憶

昭和20年1月24日、宿舎の1つだった角塩屋旅館にて撮影した1枚。
写真提供：熊本県八代市日奈久出身 桑原隆文氏

沖縄戦終結から今年で 79 年目を迎えます。戦争を体験した世代が少なくなる中、戦争体験をいかに継承していくかが課題となっています。今回は、当時9歳だった2人の少年が、学童疎開での生活や体験したことを紹介します。

沖縄戦における糸満市域の情報は、『糸満市史 資料編 7 戦時資料上巻』『同下巻』で詳しく紹介しています。 生涯学習課 840-8163 ID 15173

学童疎開の始まり

1944年8月、当時、摩文仁国民学校3年生の山城正義さん、大屋利秀さんは疎開するため、那覇港に向けて出発しました。2人とも「親に行ってきなさいと言われた。小さかったから、怖いとか特に考えず行ったね」と話します。那覇港に到着後、約1週間ほど港の近くに滞在していたと言い、山城さんは「家族が滞在先に様子を見に来ていた子もいたよ。私の父親は兵隊で、訓練で波の上に毎日行っていたから、たまに見に来ていた」と話します。

出港。対馬丸沈没

摩文仁国民学校の児童らは疎開船の和浦丸に乗船し、対馬丸、暁空丸とともに那覇港を出発しました。大屋さんは「当時は港に大きな船が入れなかったから、小さな船で沖まで向かって、そこから縄のはしごで船に乗り込んだ」と話します。

出港から数日がたったある日、「夜に警笛が鳴り、全員甲板に出るように指示された。大きな音も鳴ったが、もう大丈夫と言われたので寝た。次の日、いつも見えていた対馬丸が見えなくなっていた。そのときは聞かなかったが、戦時中だから、そういうことだろうと思った」と山城さんは話し、当初は鹿児島を目的地にしていた和浦丸ですが、「対馬丸が沈没したから、行き先を長崎に変えたらしい」と当時の状況を振り返ります。

疎開先での生活

長崎港に到着し、摩文仁国民学校の児童らは疎開先の熊本県日奈久町（現八代市）へ向かいます。大屋さんは現地の学校生活を振り返り、「学校は日奈久の子と同じ（校舎）で、沖縄の子は午前、日奈久の子は午後で授業していたから、関わりはなかった。冬は寒くて、手足が凍えそうだった。学校が終わると、すぐにお湯に手足を突っ込んでいた」と、山城さんは「食事も最初は普通に食べられたが、日がたつにつれて少なくなっていった。空襲があった日は山に逃げて、果物をとって食べたりもした」とそれぞれ話し、疎開先の宿舎前で撮った写真を見つめます。

再疎開。そして終戦

日奈久で生活し約1年後、隣町の二見村（現八代市）へ再疎開しますが、「終戦も近かったから、学校もほとんどなかったね」と山城さんは言います。

1945年8月15日、玉音放送が流れ、終戦を迎えます。当時、宿舎の2階にいたと言う大屋さんは「放送が流れたあと、その日のご飯はなかった。戦争に負けて、これからひもじい思い、大変な思いをすると子どもながらに思った。終戦後は、九州に親族がいる子は引き取られたりして、子どもたちは少なくなっていった」と話します。

変わり果てた故郷

終戦から約2年後、沖縄へ帰郷しますが、「故郷は変わり果てた姿になっていた。真和志村（現那覇市の一部）の人たちが米須に住んでいたから、その地域も立ち入り禁止になっていた」と大屋さんは話します。「沖縄に戻っても親、兄弟が亡くなっていた子、家族全員が亡くなっていた子もいる。私の父親も戦死して、下の3人の妹も母親、兄と山原に避難していたが亡くなっていた」。山城さんはそう言って、少し目を伏せました。

大屋 利秀さん

1935（昭和10）年生まれ。米須出身。沖縄帰郷後、米軍基地従業員や配達業などにいそしみながらも、三線を趣味に生活を送る。

山城 正義さん

1935（昭和10年）生まれ。米須出身。沖縄帰郷後から現在まで農業を行い、現在も1日1回、畑に通う日々を送る。

写真：当時の日奈久国民学校

日奈久町での生活

糸満市から日奈久町に、兼城・真壁・摩文仁国民学校の児童、関係者ら131人が疎開した。日奈久町は温泉町で、多くの温泉旅館があり、沖縄から疎開した15校の児童らは22軒の旅館に分散して宿泊していたが、温泉町に大集団が生活したため、食料が少なく、児童らは常にひもじい思いをしていた。また、疎開した年の冬は何十年ぶりの寒さで、冬用の衣服がなかったために、霜焼けの悪化で病院で治療を受ける児童もいた。